

小学校4年生の体育授業におけるフラッグフットボールの 状況判断の発揮場面に関する事例研究

— 学習グループの児童の発話に着目して —

坂田 行平

(2022年10月7日受理)

A scenario that demonstrates decision-making about flag football
in a 4th-grade physical education class:
Children's utterances

Kohei Sakata

Abstract: This study aimed to analyze and interpret children's utterances in the classroom, as well as when they moved around during games of flag football. We used this case to clarify the ways in which children make decisions in this context. We derived the following four points: (1) It was possible to ascertain how children on the defense team in the game engaged in decision-making with respect to the sampling group, based on an analysis of the teacher's guidance and the children's utterances and movements in class. (2) The children made decisions based on the knowledge they had acquired through learning. (3) The children were able to make decisions and respond immediately to offensive maneuvers that differed from the ones they had initially anticipated. (4) The children had the knowledge they needed for decision-making and were able to make decisions, but this was not always consistent with their actions.

Key words: elementary physical education, ball games, decision making

キーワード：小学校体育科，ボール運動，状況判断

1. はじめに

各種の身体運動の技能は、運動遂行中の環境の安定性と予測性の観点から「クローズドスキル」と「オープンスキルの2種類の運動スキルに分類される。「クローズドスキル」は、「環境の変化が少なく安定しており、予測が容易なスキル」であり、一方、「オープンスキル」は、「たえず変化し不安定な環境でなされ、予測が困難なスキル」であるとされている(阪田ほか、

1995)。ボール運動の多くはオープンスキルの種目に分類され、その特性として、①変化する環境条件に対応しながら運動を遂行する必要がある、②運動を遂行する際に非常に多くの選択肢が存在する、の2点が挙げられる(中川、2000)。また、ボール運動の技能を高めるためには、パスやシュートなどの技術練習に終始するのではなく、「自分がおかれている環境条件を的確に分析して把握し、何が適切な競技行為かを瞬時に決定するといった頭のなかの働きが必要不可欠」(中川、2000)であり、このような頭の中の働きは「状況判断」(中川、2000)と呼ばれる。このことから、ボール運動の技能を高めるためには、基本的なボール操作の技能だけを練習するのではなく、試合中のさまざまな場面でどのような競技行為を選択すべきであるのか

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：木原成一郎（主任指導教員）、山崎敬人、
齊藤一彦、大後戸一樹

を瞬時に判断する「状況判断」を向上させることが必要であると考えられる(中川, 2000)。ボール運動の試合における運動遂行の過程に関しては、「①競技状況の分析と評価」、「②競技行為に関する決定」、「③競技行為の遂行・指示」の3つの過程が存在し、「①競技状況の分析と評価」、「②競技行為に関する決定」が「状況判断」の過程である(中川, 2000)。また、ケルン(1998)も「試合状況の分析と知覚(第1段階)」「課題の思考上での解決(第2段階)」「戦術課題の運動による解決(第3段階)」という3つの段階が存在するとしている。この「試合状況の分析と知覚(第1段階)」及び「課題の思考上での解決(第2段階)」が「状況判断」(中川, 2000)に当たると考えられる。状況判断と知識の関係について、中川(2000)は各種種目固有の知識である「宣言的知識」(アンダーソン, 1982)と特定の状況下で用いられる解決の仕方に関する知識である「手続的知識」(アンダーソン, 1982)がボール運動の試合において状況判断を行う際に必要不可欠であるとしている。「宣言的知識」にはルールやポジションなどの状況要素に関する知識や競技行為に関する知識、各種種目における戦術の原則に関する知識が含まれている。それに対し、「手続的知識」は、試合状況内の手がかりとその状況に有効な競技行為とが結合した形で記憶されており、ボール運動の試合において、ある特定の状況を認識すると、それと結びついていた競技行為が瞬時に選択されることとなる。三上(2020)はボール運動の知識と技能の関係を図1のように整理している。

「認知技能」、「運動技能」は、アンダーソン(1982)で用いられている用語である。中川(2000)の「競技における運動遂行過程の概念的モデル」で示された「状況判断」の過程およびケルン(1998)が示す運動遂行の過程における「①競技状況の知覚と分析」、「②戦術課題の思考上の解決」が「認知技能」にあたると考えられる。

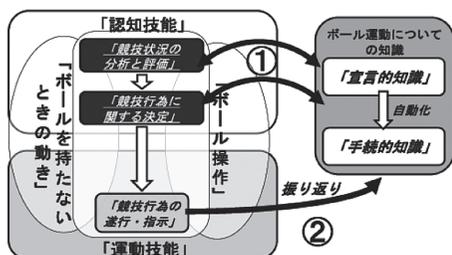


図1 ボール運動における知識と技能の関係

図1中の①は、ボール運動における「認知技能」(アンダーソン, 1982)とボール運動についての知識との関係を示している。ボール運動において「認知技能」(アンダーソン, 1982)を発揮する際には、記憶に蓄積された「宣言的知識」と、そこから自動化された特定の試合状況と競技行為が結びついた「手続的知識」を用いて、「競技状況の分析と評価」、「競技行為に関する決定」(中川, 2000)を行っていると考えられる。加えて、蓄積されていた知識を用いて試合状況を分析し把握することで新たな知識を獲得すると考えられる。また、図1の②は、ボール運動における「運動技能」(アンダーソン, 1982)とボール運動についての知識との関係を示している。「認知技能」(アンダーソン, 1982)を発揮した結果下された決定による運動の遂行は「運動技能」に当たると考えられる。運動遂行の結果を振り返ることで、新たな知識が蓄積され、そこで蓄積された知識を用いる「認知技能」はより洗練されると考えられる。ボール運動に関する知識と技能の関係について、中川(2000)も「宣言的知識」および「手続的知識」の量と「状況判断能力」の優劣との間には積極的な関連があるとしている。

近年、小学校体育科のボール運動の試合における状況判断に関する実践が多く見られる(中山ほか, 2017; 中山, 2017; 東川ほか, 2007; 丸井, 2012; 村田・清水, 2018; 森田ほか, 2014)。これらの実践では、ゲームにおける学習者の動きの変容などから学習者の状況判断の評価を行なっている。しかし、学習者の動きは図1における運動の遂行つまり「運動技能」(アンダーソン, 1982)であり、この変容は「認知技能」(アンダーソン, 1982)である状況判断の変容とは言えないのではないだろうか。グリフィンが提唱した戦術アプローチでは、ゲーム場面で「何を行うべきか」を適切に判断する「意思決定(decision making)」と、実際の動きである「技術の行使」を合わせて、ゲーム中に発揮される「ゲームパフォーマンス」と示している。ゲームパフォーマンスを評価するためには、「認知技能」である意思決定だけ、もしくは「運動技能」であるゲーム場面における実際の動きだけを評価するのではなく、両方を評価する必要があると考える。

ボール運動における技能の評価については、動きの変容や試合記録など目に見える形で現れる「運動技能」(アンダーソン, 1982)の評価に比べ、認知手続を伴う状況判断をはじめとした「認知技能」(アンダーソン, 1982)そのものを見とることが難しいため、評価は難しいと考えられる。しかし、図1で示したようにボール運動における「認知技能」の質にはボール運動についての知識が関係していると考えられる。そのため、

ボール運動についての知識に焦点を当てることで状況判断などの「認知技能」の評価は可能になるのではないだろうか。鬼澤(2006,2007a, 2007b)は、小学校高学年のバスケットボール授業における攻撃に関する状況判断の変容について「戦術的状況判断テスト」で知識を評価するとともに、適切にシュートしたかどうか動きの変容についての評価も行うことで、攻撃におけるゲームパフォーマンスの変容に関する研究を行っている。

一方で、実際に授業中で行われるゲーム場面で発揮される児童の状況判断を明らかにした先行研究は管見の限り見られなかった。授業における教師の指導と児童の発話や動きの事実から、状況判断の実態を明らかにすることはボール運動の指導改善につながるのではないかと考える。心理学で用いられる「認知技能」と体育科教育で用いられる「状況判断」の用語はボール運動で示している内容が同一と考えられるので、本論文では、状況判断の用語を使用することとする。

本研究では授業中の児童の発話とゲーム中の動きを分析し、解釈することで、事例的に状況判断の発揮の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2.1 対象の説明

2.1.1 対象・期日

本授業は、2018年10月中旬から11月末にかけて、H県F小学校の4年生64名(男子32名, 女子32名)を対象に「フラッグフットボール」(全10時間)の単元を実施した。なお、この小学校は教科担任制で授業を行っている学校で、授業において指導を担当したのは、教職歴10年(私立小学校3年, 国立大学附属小学校体育専科7年)の男性教諭である。

2.1.2 教材と単元の指導計画

本研究においては、フラッグフットボールの防御に焦点を当てた授業を行った。フラッグフットボールを取り上げた理由は次の3点である。①試合の中で複雑なボール操作を必要とせず、攻守の役割に基づく行動の選択肢が明確なため、「ゴール型」(文部科学省, 2018)の種目の中でもゲーム中における状況判断が比較的容易な種目であること、②攻守の明確な区別のもとでゲームが行われ、攻防が1回ごとに区切られているので、1回の攻防ごとに作戦やゲーム中の動きについて振り返り、確認することができること、③小学校学習指導要領の中でも「ゴール型」を指導する教材として示されていること、である。このフラッグフット

ボールの教材としての価値については、様々な先行研究で言及されている(大後戸, 2003; 宗野, 2013; 宗野, 2015; 山名, 2018)。フラッグフットボールの持つ特性として、攻撃は作戦におけるメンバーの役割が明確であり、味方から作戦通りに攻撃を遂行することが求められるため、相手の防御の動きに応じた状況判断の場面が生まれにくい。これに対して、攻撃の動きによって対応を考えて、自分の防御の動きを考えざるをえない防御の方がより状況判断を求められる場面が多い。以上のことから、攻撃の学習に加えて、防御の学習にも同等に重点を置くことが必要であると考えられた。単元の指導計画は表1の通りである。また、授業で用いたフラッグフットボールのルールは表2の通りである。

ゲームに参加する人数が多くなれば、それだけゲームの要素が複雑化し、ゲーム場面における状況判断の対象が多くなってしまふ(岩田, 2016)ことを踏まえ、本単元においては、フラッグフットボールの戦術的課題に取り組ませるためには、ゲーム人数を少なくする必要があったと考えた。フラッグフットボールの攻撃の役割として、①ボール保持者、②ガード(防御側からボール保持者を守る)、③レシーバー(ボール保持者からのパスを受ける)の3人がフラッグフットボールの作戦を遂行する最小単位であると考えた。3人対3人のゲームを行うことで、フラッグフットボールの戦術的課題に迫ることができると考えた。そこで、単元の最終的なゲーム形式を3人対3人のゲームとして設定された。授業で用いたフラッグフットボールのルールは表2の通りである。

単元の初期は2人対2人の学習から始めた。ここでは、フラッグフットボールのルールを把握することを学習の目的としている。プレーする人数を少なくすることで、児童がゲーム中での動きについての状況を把握しやすくし、ゲームの理解を深めることをねらいとした。また、2～5時間目の授業における作戦は、教師が提示したラン作戦とパス作戦のそれぞれの作戦を含んだ8つのパターン作戦から選ばせた。あらかじめ決められたパターン作戦から攻撃の作戦を選ばせ、攻撃側の作戦の選択肢を減らすことで、防御側が攻撃側の作戦を予測しやすくなり、防御側にも守り方の原則を指導しやすいくと考えた。6～10時間目では、作戦を考えることを学習課題とした。作戦の選択肢が増えることで、防御側にとっては状況判断を求められる場面が増えると考えた。

小学校4年生の体育授業におけるフラッグフットボールの状況判断の発揮場面に関する事例研究
 —学習グループの児童の発話に着目して—

表1 単元の指導計画

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1次	2次		3次		4次				
オリエンテーション ・学習の進め方 ・チーム分け ・ルールの確認	○用具の準備, 準備運動 ○基礎練習 ・しっぽとり ・パスキャッチ ・ランキャッチ ○ゲーム(2人対2人) ・パターン作戦(ラン作戦, パス作戦)の中から, 作戦を選び実行する。 ・パス作戦, ラン作戦における攻撃と防御の基本的な役割についての学習		○用具の準備, 準備運動 ○基礎練習 ・パスキャッチ ・ランキャッチ ○ゲーム(3人対3人) ・パターン作戦(ラン作戦, パス作戦)の中から, 作戦を選び実行する。 ・ボール保持者とボール非保持者の動き方の学習 ・攻撃に対応するための防御の学習		○用具の準備, 準備運動 ○基礎練習 ・パスキャッチ ・ランキャッチ ○ゲーム(3人対3人) ・チームで作戦を考える ・考えた作戦の練習, 作戦の修正 ・まとめのゲーム				

表2 授業で用いたフラッグフットボールのルール

	2人対2人	3人対3人
コート	・縦 15m×横 6m ・縦 2.5m ごとにラインを引き, 得点に段階をつける。	・縦 15m×横 9m ・縦 2.5m ごとにラインを引き, 得点に段階をつける。
基本的なルール	<ul style="list-style-type: none"> ・攻撃の機会を保障するため, 時間制ではなく, 回数制(4回)でゲームを行う。 ・ゲーム開始時にボールを保持しているQB(クォーターバック)はチーム内で順番に交代して行う。 ・ゲーム開始はQBがボールを持った状態で始める。 ・1回の攻撃が終了したら, 攻守交代となる。 ・1回の攻撃が終了となるのは次の場合である。 <ol style="list-style-type: none"> ① ボール保持者のフラッグが1本でも取られる。 ② ボールがコートから出る。 ③ ボールが地面に落ちる, もしくはパスしたボールを防御側にインターセプトされる。 ・防御側がボールをインターセプトしたとしても, そこでゲームは止まり, ターンオーバーはしない。 ・スクリーミングラインを越えるパスは一度のみ投げることができる。 ・ボール保持者がボールを持ったままスクリーミングラインを一度越えた後で, パスを投げることはできない。 	
得点形式	<ul style="list-style-type: none"> ・1回の攻撃が終わったときに進んでいた距離に応じて得点が決まる。 ・ボールが地面に落ちたり, パスしたボールを防御側にインターセプトされたりした場合は, 0点とする。 ・ゲーム開始時のポジションは右図に示す。(右図で示したゲームは3人対3人の場合) <p>A, B, C: 防御側 ①, ③: 攻撃側 ②: 攻撃側(ボール保持者: QBのポジション)</p>	

2.1.3 授業の概要

フラッグフットボールは, 先行研究で示されたように, 作戦を成功させるためには, 一人ひとりの役割が重要であり, その役割の重要性を学習の内容に取り込むことで, 戦術的課題に焦点化することができる教材である。一方で, 中川(2000)によって, ゲーム中にパフォーマンスを発揮するためには, 宣言的知識と手続的知識を身に付けることの重要性が示されている。そこで, まず単元前半では宣言的知識であるルールの理解や表3に示した, 攻撃側と防御側の役割を理解させることを学習内容として設定した。そのため, 2人対2人や3人対3人の学習では, 授業者が用意した作戦(パターン作戦)の中から児童に選ばせることで, 共通の戦術的課題に取り組みさせる学習を行った。防御には2人対2人ではプレスディフェンス(以下, ディフェンスはDFと略す)とマンツーマンDFがあり, 3人対3人ではプレスDFとマンツーマンDFの他に

ゾーンDFが加わることを学習させた。また, ゲームにおける学習の進め方として, ゲーム前に作戦を確認する話し合いを行い, ゲーム後にはプレーについての話し合いを行うことで, 即時的にそのゲームにおける状況判断を振り返り, 修正につなげる活動を行った。また, 4人で1グループとすることで, ゲームに出ない観察者の役割を作られた。この観察者の役割は, ゲームをコート外から見ること, グループの仲間が事前に合意した作戦通りに動くことができているか等, ゲーム後の振り返りをする際の情報を提供することであった。

宣言的知識を身に付けさせた後で, 中川(2000)が「試合状況の手がかり(条件)とそこで有効な競技行為が結合した形で記憶されている」と示した手続的知識を教えた。例えば, 防御の場合の状況判断は, ボール保持者がまだスクリーミングラインの内側にいる場合は, パス作戦の可能性があるため, パスレシーバーも守る

表3 攻撃と防御の役割

2人対2人	攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・(ボール保持者) ボール保持者とガード役がタイミングを合わせて、意図的に作った通り道に走り込む。 ・(ボール非保持者) ガードをしてボール保持者の通り道を作る。 ・(ボール保持者) フラグを取られる前に、あらかじめ決めておいた場所へパスを投げる。 ・(ボール非保持者) レシーバーは防御側を振り切って、パスを受け取る。
	防御	<ul style="list-style-type: none"> ・ボール保持者のフラッグを取る。 ・プレス DF: 防御側の2人がボール保持者のフラッグを取りに行く。 ・マンツーマン DF: 守る相手を決めて、QBとレシーバーのそれぞれを守る。
3人対3人	攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・(ボール保持者) ボール保持者とガード役がタイミングを合わせて、意図的に作った通り道に走り込む。 ・(ボール非保持者) ガードをしてボール保持者の通り道を作る。 ・(ボール保持者) フラグを取られる前に、あらかじめ決めておいた場所へパスを投げる。 ・(ボール非保持者) レシーバーは防御側を振り切って、パスを受け取る。 ・相手の防御を想定した作戦の実行。
	防御	<ul style="list-style-type: none"> ・ボール保持者のフラッグを取る。 ・プレス DF: 防御側の2人もしくは3人がボール保持者のフラッグを取りに行く。 ・マンツーマン DF: 守る相手を決めて、QBとレシーバーのそれぞれを守る。 ・ゾーン DF: 人を守るのではなく、あらかじめ決めた場所を守る。 ・相手の攻撃を想定した防御の実行。

必要が生じるが、ボール保持者がスクリメージラインを越えた後はパスが投げられることは無いので、ボール保持者のフラッグのみを取りに行けばよいことになる。つまり、スクリメージラインを越えるかどうかは防御側の状況判断の判断材料になると考えた。

ゲーム開始後の防御側の状況判断の判断材料とプレー選択の原則を表4に示した。ゲームの時間的な流れとしては①から②へと移行しているものとして示した。ボール保持者(QB)とはゲーム開始時にボールを持っているプレイヤーである。この原則に従って、児童に、「もしボール保持者(QB)がスクリメージラインの内側にいれば、パスを投げる可能性があるので、レシーバーを守る」「もしボール保持者(QB)がスクリメージライン内からレシーバーへパスを投げれば、レシーバーを守る」「もしボール保持者(QB)が

ボールを保持したままスクリメージラインを越えて走れば、パスを投げる可能性はないので、レシーバーではなく、ボール保持者(QB)を守る」ことを指導した。また、手続的知識について、中川(2000)が「どこを注意すれば有効な情報が得られるのか、あるいはどこをみれば重要な手がかりが得られるのかを指示する知識」と示していることから、表4の場面であれば誰を守るのかについて、どこを見ればわかるのかを気づかせるためにビデオ動画を提示しながら学習を行った。ボール保持者(QB)がボールを持って走ることでスクリメージラインを越えたのか、パスを投げることでスクリメージラインを越えたのか、を確認することで誰を守るのかを判断するという手続的知識に関する学習を行った。

表4 防御側の状況判断の判断材料とプレー選択の原則

時間的な流れ	判断材料	プレー選択の原則
①ボールがスクリメージラインの内側にある状況	ボール保持者(QB)がスクリメージライン内でボールを持っている。	プレス DF の場合、ボール保持者(QB)のフラッグを取りに行く。 マンツーマン DF またはゾーン DF の場合は、パスが投げられる場合にも備えてパスのレシーバーを守る。
②ボールがスクリメージラインを越える状況	ボール保持者(QB)がスクリメージライン内からレシーバーへパスを投げる。	レシーバーを守り、レシーバーがパスキャッチする前にパスカットをするか、パスキャッチしたレシーバーのフラッグを取りに行く。
	ボール保持者(QB)がボールを保持したまま、スクリメージラインを越えて走る。	ボール保持者(QB)のフラッグを取りに行く。

2.1.4 抽出グループの分析

抽出グループは、運動技能は高いがゲームの振り返りが苦手なM児とY児、転校してきたT児、本単元までも話し合い活動で中心的な役割を担っていて、本単元においても話し合いを進めることが予想されたS児の4人グループである。このグループは話し合いを進めることが上手なS児がいることで、運動技能が高いM児とY児が自分たちの動きや状況判断について会話する機会が増えることが予想された。また、T

児はフラッグフットボールのような陣取り型ゲームの学習は未経験であったため、同じグループの児童からのアドバイスなどの発話が予想された。このことから、グループの話し合いで、状況判断を巡る会話が見られると想定されたため、このグループを抽出することとした。

2.2 資料の収集

観察及び記録者として大学院生2名が授業観察に参

加し以下の記録を収集した。授業の中での変容を分析するための資料として、(1) 授業全体の様子をビデオ1台撮影するとともに、4グループの防御側に正対した方向から4台で各グループの防御行動を撮影した。(2) 抽出グループの発話をボイスレコーダーで記録した。(3) 全児童の毎時間の学習カードを収集した。

2.3 分析の方法

授業観察者2名の大学院生と調査者が共同で、各グループの防御行動を撮影したビデオ動画と音声及び抽出グループの発話を記録したボイスレコーダーの記録をもとに、抽出グループのすべての防御行動を発話とビデオ映像から作成した。鬼澤(2006, 2007a)において、単元初期に比べて8時間段階、さらに10時間段階と単元が進むにつれて状況判断能力が有意に向上することが報告されていることを踏まえ、分析の資料は状況判断が高まり、状況判断の発揮場面があらわれると予想された単元最後の10時間目に行われたゲームを分析の対象とした。

そして、表4に示した①の場面と②の場面の切り替わりに求められる状況判断が見られた場面を取り出した。抽出グループの状況判断に関する知識を明らかにするために、児童の会話と前時の授業の学習カードの記述から再現した。また、防御行動において、体の向

きや顔の向きが状況判断できているかを判断する資料となるので、その場面をビデオ映像から抽出した。これらの資料から抽出グループの状況判断を解釈して調査者が記述した。抽出グループの状況判断の解釈について分析結果を確かなものにするために、複数の調査者による「トライアングレーション」(メリアム, 2004)を用いて授業観察者2名の大学院生と調査者3名で協議し、3名の解釈が一致するまで協議を続けた。

3. 結果と考察

3.1 実際の状況判断の発揮場面

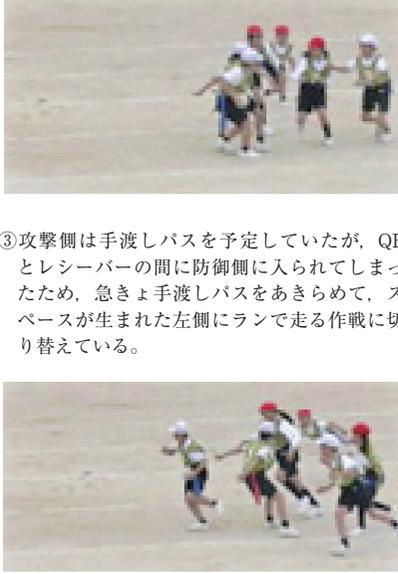
単元の10時間目に行ったゲーム場面における抽出グループの発話記録とビデオ撮影したゲーム中の動き、前時までの学習カードをもとに指導者がそれに対する解釈を行った。取り出したゲーム場面は、表4に示した①の場面と②の場面の切り替わりに求められる状況判断場面が見られたラン作戦とパス作戦の2プレーである。

3.1.1 場面1 (ラン作戦)

パス作戦での場面を表5にまとめた。表2で示したコート図と同様にA・B・Cは防御側のポジション、①・②・③は攻撃側のポジションを示している。

表5 ゲーム場面1 (ラン作戦に対する防御)

児童の言葉	動きの事実	解釈	資料(前時の学習カードの記述)
S 児「Tさん準備しましょう。オッケー? わかったるね」 T 児「同じ方法、同じ方法」 Y 児「わかった」	S 児 (A)・Y 児 (B)・T 児 (C) プレー前に防御についての確認をしている。	前にいる二人がQBのフラッグを取りに行つて、後ろの一人がゾーンで守つて、様子を見るといふチームとしての防御をS 児・T 児・Y 児の3人は共有できていると思われる。	
Y 児「1回パスかと思った」 S 児「まあまあ、相手が」 Y 児「俺がパスの時」 X 先生「パスだったとしても突っ込んだらパス投げにくくなるけん」 Y 児「そうなんよね」	①ゲーム開始前のポジション  ②プレー開始と同時に、S 児とT 児が右側からQBのフラッグを取りに行つている。後ろで待機しているY 児も右側に寄つているため、左側に大きなスペースが生まれている。	Y 児「1回パスかと思った」 相手がすぐに走つて来なかったことからランプレーではなく、パスプレーではないかと考えた。レシーバーが右側から走ってくることに備えて、右寄りに動いたと考えられる。 S 児「まあまあ、相手が」 S 児は相手が作戦通りではなく、急ぎょプレーが変わつたのだろうと	S 児の防御に関する記述 A: (攻撃側から見て) 左側からQBに回っていく。 B: QBが-1点ゾーンから出たら、QBに行つて、-1点ゾーンから出なかつたら、③につく。 C: ①と③の間(攻撃側から見て右側)を通過つて、QBにつくこむ。

	 <p>③攻撃側は手渡しパスを予定していたが、QBとレシーバーの間に防御側に入られてしまったため、急ぎょ手渡しパスをあきらめて、スペースが生まれた左側にランで走る作戦に切り替えている。</p>	<p>判断した。おそらく相手の作戦は手渡しパスだったと思われるが、手渡しパスをする空間が無かったため、QBのランプレーに切り替えたと思われる。</p> <p>前時までの学習カードでは、AのポジションであるS児は「A：(OFから見て)左側からQBに回っていく。」「C：①と③の間(OFから見て右側)を通して、QBにつっこむ。」と動きについて記述しているが、実際のプレーでは、Cと同じ方向からQBに突っ込んでくる。そのため、AとCで両サイドから挟み込みながらフラッグを取るという動きができず、QBが走り込むスペースを作り出してしまったと考えられる。</p>	<p>T児の防御に関する記述 A：右から。 B：AとCか、前の人 が止められなかった ときにBしかいない ので、よく見て行動 するように気をつけ る。 C：Aは右に近いので、 右、Cは左に近いの で左としています。 とりあえずAとC はQBのフラッグを 取るようにして、- 1点ゾーンで相手に 点を取らせる。</p> <p>Y児の防御に関する記述 A：②をせめる。右か ら行く。 B：自分のチームはA とCでQBに行く。 C：Cは左に回り、A といっしょに②をせ める。</p>
--	---	--	---

ゲーム前に防御についての話し合いを行った場面では、プレスDFとゾーンDFを組み合わせた防御を想定している。AとCのポジションの人はQBにプレスDFに行き、Bのポジションの人は後方で、相手チームがパスをするからランで走ってくるのかを見極めて、プレーすることを想定している。これは、表4で示した防御側のプレイヤーの状況判断の判断材料とプレー選択の原則を理解しているからであると考えられる。実際のゲームでは、ゲーム開始と同時に攻撃チームの①と③のプレイヤーが近づきよう動きを見せた。これを見た防御チームがQBと③の間で手渡しパスが行われるのではないかと考え、防御側の全員がQBと③を守りに行っていた。それにより、攻撃側はQBと③の側にDFに寄せられた攻撃側は急遽作戦を手渡しパスから、QBが左のスペースに走る左ラン作戦に切り替えている。右側に寄っていた防御チームは

左側に大きなスペースができており、そこを走られてしまっている。ただし、防御チームの3名は攻撃チームの作戦の切り替えにも気づいており、左のスペースにQBが走ろうとした姿を見て、すぐにQBを守りにいく対応をしている。これは、表4で示した防御側のプレイヤーの状況判断の判断材料とプレー選択の原則に基づいて、「ボール保持者(QB)がボールを保持したまま、スクリメージラインを越えて走る」場合には「ボール保持者(QB)のフラッグを取りに行く」という状況判断をすることができたと解釈できる。この後、防御チームは、QBのフラッグを取ることができ、防御の行動としても成功している。

3.1.2 場面2 (パス作戦)

パス作戦での場面を表6にまとめた。

表6 ゲーム場面2 (パス作戦に対する防御)

児童の言葉	動きの事実	解釈	資料 (前時の学習カードの記述)
<p>Y児「俺が前だったら右行って、Sさん左行って、予備」 S児「私が予備」</p>	<p>Y児(A)・S児(B)・M児(C)がプレー前に防御についての確認をしている。</p>	<p>Y児の防御の考え方はAのポジションの人がQBに突っ込む。後ろの人は、スペースをふさぎつつ、ゾーンで守るという考えを持っていることがうかがえる。</p>	<p>Y児の防御に関する記述 A：②を守る。右から行く。 B：自分のチームはAとCでQBに行く。</p>

小学校4年生の体育授業におけるフラッグフットボールの状況判断の発揮場面に関する事例研究
 —学習グループの児童の発話に着目して—

<p>S 児「私がここにおいて、後ろ行けばいい」 M 児「一旦行動見んにゃいけん」 S 児「わかったわかった」</p>		<p>前時の学習カードでは、AとCがQBに行くことしか書かれていないが、Bの防御についても考えていると思われる。</p> <p>S 児の防御は攻撃側に近い前にいる二人がQBに突っ込めばよいと考えていると思われる。</p> <p>M 児「一旦行動見んにゃいけん」は、Bが前に突っ込むのではなく、パスが来るのか、ランが来るのか相手の出方によって対応する人がいた方がよいと考えていると考えられる。</p>	<p>C：Cは左に回りAと一緒に②を守る。</p> <p>S 児の防御に関する記述 A：(攻撃側から見て)左側からQBに回っていく。 B：QBが-1点ゾーンから出たら、QBに行つて、-1点ゾーンから出なかつたら、③につく。 C：①と③の間(OFから見て右側)を通過して、QBにつく。</p>
<p>S 児「M 君は突っ込む予定だった。で私は様子見る」 X 先生「今M 君は役割なんだったん？」 M 児「あっち行くけど、O さんがあたふたしてあっち投げそうな感じだったから、もうH 君のところ」 M 児「あのときにもう2人ガードしていたから」 S 児「私は後ろおったじゃん。Y 君しか行ってなかったよ」 M 児「そうだったん？」 S 児「うん」 M 児「あ、そっか。」 S 児「M 君はちゃんと予定通り突っ込むべきだった」 M 児「だけど。」 T 児「予備がおるんや。」 M 児「でもそれはわかってからのことじゃけんさあ」</p>	<p>①ゲーム開始前のポジション</p>  <p>②M 児はスタート直後一瞬、QB (O 児)に行きかけたが、QB (O 児)の動きを見て、パスと判断して、自分の目の前にいた攻撃側 (H 児)を守っている。</p>  <p>③OF (H 児)についていたM 児はQB (O 児)の動きを見ながら、パスを確認し、パスカットを試みた。</p> 	<p>M 児自身が前時の学習カードで記述していることは、Cは③を守るというマンツーマンDFである。ただし、チームの作戦として考えた時には、「AとCがQBに突っ込む」という動きで合意していたので、M 児の動きは事前に合意した動きではなく、ゲームの状況を見て、守り方を変える判断をしたと考えられる。</p> <p>M 児「だけど、あのときにもう2人ガードしていたから」 S 児「私は後ろおったじゃん。Y 君しか行ってなかったよ」 M 児「そうだったん？」 S 児「うん」</p> <p>実際にはY 児、S 児が前に守りに行く動きが見られたことから、M 児の判断が正しかったと考えられる。</p>	<p>M 児の防御に関する記述 A：②に行く。 B：よびとして、もしつきぬけてきた方に行く。 C：③に行く。</p>

ゲーム前に防御についての話し合いを行った場面では、プレスDFとゾーンDFを組み合わせた防御を想定している。AとCのポジションの人はQBにプレスDFに行き、Bのポジションの人は後方で、相手チームがパスをするかランで走ってくるのかを見極めて、プレーすることを想定している。これは、先述した表5のゲーム場面1と同じ防御の作戦である。防御につ

いてのゲーム前の話し合いで、S 児の「T さん準備しましょう。オッケー？わかつとるね」の発言とT 児の「同じ方法、同じ方法」の発言からもチーム内で共有されている防御の方法であると解釈できる。実際のゲームでは、CのポジションにいたM 児がQBを守りに行くプレスDFを行わずに、③のプレイヤーを守るような動きをしている。その理由として、M 児は

「投げそうな感じだったから」と説明している。つまり、QBの動きを見て、③にパスが来ることも想定したのである。また、M児が「あのときにもう2人ガードしていたから」と話しているように、BのポジションであるS児もQBを守りに行っていることを確認した上で、M児は③を守りに行っているのである。これらのことから、M児は表4で示した「パスが投げられる場合にも備えてパスのレシーバーを守る」というプレイヤーの状況判断の判断材料とプレー選択の原則に基づいて、QBやレシーバーの動きや仲間の動きを見ながら、誰もパスのレシーバーを守りに行っていないから自分が守りに行くという状況判断をすることができていると解釈できる。

一方で、S児は「私は後ろおったじゃん。Y君しか行ってなかったよ」と認識しており、M児がQBに向かって守りに行かなかったことについて「M君は突っ込む予定だった」とゲーム後に指摘している。先述したように、実際のゲーム場面ではS児もQBを守りに行っているのに、S児は誤った認識をしていたことになる。このゲームでは、T児が観察者となっていたが、このゲーム後の振り返りでは、S児とM児の動きについて観察者としての情報を提供することができておらず、観察者の役割を發揮できていないので、グループの振り返りが十分にできたとは言えない。この事実は、教師がS児やT児に対して、S児が実際にどのように動いて防衛していたのかを確認する指導の必要性を示唆している。

3.2 まとめ

授業中の児童の発話とゲーム中の動きを分析し、解釈することで、次の4点が明らかとなった。

1点目は、授業における教師の指導と児童の発話やゲーム中の動きの事実から、抽出グループに関して防衛側の児童の状況判断の發揮場面が確認できたことである。

2点目は、知識と状況判断の関係についてである。場面1と場面2ともに児童は、表4で示した防衛側のプレイヤーの状況判断の判断材料とプレー選択の原則をもとにゲーム中の状況判断を行っており、状況判断の原則を授業で学んだことをもとに状況判断することができたのではないかと解釈したことである。

3点目は、場面1から当初予想した攻撃とは異なる攻撃に対して、状況判断して対応することができた事実が把握でき、目の前の攻撃の動きに対して即時的にその場で防衛側が状況判断を求められ、發揮できた実際の場面を把握することができたことである。

4点目は、状況判断するための知識があり、状況判

断できたとしても実際の行動とは一致していないことがあることである。場面2ではS児のように状況判断ができていても実際の行動の適切さには結びつかない児童もいた。もちろんこれは今後の授業改善に生かされる情報にもなる。授業者によるS児への指導や観察役のT児への指導の必要性が示されたと言える。

4. 結論

本研究の目的は、授業中の児童の発話とゲーム中の動きを分析し、解釈することで、事例的に状況判断の發揮場面の実態を明らかにすることであった。分析の結果、以下のことが明らかになった。

- ・ 授業における教師の指導と児童の発話やゲーム中の動きの事実から、抽出グループに関して防衛側の児童の状況判断の發揮場面が確認できたこと。
- ・ 児童は学習で身に付けた知識をもとに状況判断をしていること。
- ・ 当初予想した攻撃とは異なる攻撃に対して、児童が状況判断して、即時的に対応することができたこと。
- ・ 状況判断するための知識があり、状況判断できたとしても実際の行動とは一致していないことがあること。

本研究においては、限られた事例ではあるが、児童の発話とゲーム中の動きを分析し、解釈することで、ゲーム中における児童の状況判断の發揮の実態を解釈することができた。

ただし、抽出グループのみの分析、解釈しか行っていないため、他のグループの防衛行動の資料からもゲーム中における状況判断の実態について、児童の発話とゲーム中の動きを分析し、解釈することが今後の課題である。

【文献】

- 1) 阪田尚彦・高橋健夫・細江文利(1995) 学校体育授業事典, 大修館書店.
- 2) 中川昭(2000) 状況判断能力を養う. 杉原隆ほか編著, スポーツ心理学の世界. 福村出版: 52-66.
- 3) ヤーン・ケルン: 朝岡正雄ほか訳(1998) スポーツの戦術入門. 大修館書店: 55-61.
- 4) アンダーソン J. R.: 富田達彦ほか訳(1982) 認知心理学概論. 誠信書房: 236
- 5) 三上隼人(2020) 体育授業における状況判断テストの作成に関する研究—フットボールの守備に焦点を当てて—. 2019年度広島大学大学院教育

- 学研究科修士論文。
- 6) 中山泉・湯浅理枝・日野瑞保・大上輝明・木原成一郎・大後戸一樹 (2017) 「ゴール型」ゲームの「ボールを持たないときの動き (戦術的な動き)」を中心とした教材の開発—小学校中学年から中学校の授業における実践的検討。広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 45: 185-193.
 - 7) 中山泉 (2017) 「ボールを持たないときの動き」に着目したハンドボールの授業づくり—第3学年における授業実践を通して—。広島大学附属三原学校園研究紀要, 7: 134-140.
 - 8) 東川智之・岩田靖・竹内隆司 (2007) 小学校体育における侵入型ゲームの授業研究—バスケットボールにおける「サポート行動」の学習可能性に関する検討。信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要教育実践研究, 8: 153-162.
 - 9) 丸井一誠 (2012) 小学生のハンドボール授業における攻撃側の「ボールを持たない動き」の特徴に関する研究—ゲーム様相との関連性に着目して—。スポーツ教育学研究, 31(1): 1-11.
 - 10) 村田雄大・清水将 (2018) ゴール型におけるボールを持たないときの動きを高める教材開発—中学校2年生オフサイドバスケットボールを事例として—。岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 2: 183-194.
 - 11) 森田勝・吉野聡・加藤敏弘 (2014) ボールを持たないときの動きに焦点をあてたバスケットボールの授業モデル。茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 63: 437-455.
 - 12) 鬼澤陽子・高橋健夫・岡出美則・吉永武史・高谷昌 (2006) 小学校体育授業のバスケットボールにおける状況判断力向上に関する検討—シュートに関する戦術的知識の学習を通して—。スポーツ教育学研究, 26(1): 11-23.
 - 13) 鬼澤陽子・小松崎敏・岡出美則・高橋健夫・齊藤勝史・篠田淳志 (2007a) 小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上。体育学研究, 52: 289-302.
 - 14) 鬼澤陽子・岡出美則・小松崎敏・高橋健夫 (2007b) アウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上—小学校高学年児に対する戦術的知識テスト, 状況判断テストの分析を通して—。スポーツ教育学研究, 26(2): 59-74.
 - 15) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年度告示)。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf#search=%27小学校学習指導要領+体育編%27, (参照日2019年9月10日).
 - 16) 大後戸一樹 (2003) フラッグフットボールの系統性と授業実践。体育科教育, 51(5): 46-49.
 - 17) 宗野文俊 (2013) 体育授業におけるフラッグフットボールの教育内容の再検討。教育方法学研究, 38: 37-48.
 - 18) 宗野文俊 (2015) 学校体育におけるボールゲームの指導理論に関する研究: フラッグフットボールを中心にして: 北海道大学大学院博士教育学学位論文。 <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/59939>, (参照日2019年9月10日).
 - 19) 山名康介 (2018) 小学校4年生の体育授業におけるボール運動の戦術的知識について—フラッグフットボールの守備の戦術的知識の変容に着目して—。2017年度広島大学大学院教育学研究科修士論文。
 - 20) 岩田靖 (2016) 戦術中心の学習理論に学ぶ。ボール運動の教材を創る。大修館書店: 22-34.
 - 21) S.B. メリアム (2004) 質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ。ミネルヴァ書房: 297.